様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００３６６

研究課題名（和文）中唐元和期における韓愈の創作活動

研究課題名（英文）Han Yu's Creative Activities during the Yuanhe Period of the Mid-Tang Dynasty

研究代表者
好川　聡（Yoshikawa, Satoshi）

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０４５６８１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：訳注の執筆と編集作業を行い、『王維・孟浩然』（明治書院、孟浩然を担当）、『韓愈詩訳注第三冊』（研文出版、共編）を刊行した。
韓愈の創作活動の中でその遊戯性に着目し、特に他者を戯画化した詩に焦点を当てて、その作品の面白さと他者の不幸な事態を慰撫する働きがあることを論じた。
シンポジウム「安史の乱は杜甫に何をもたらしたのか」で口頭発表を行い、その成果をもとに『宋本杜工部集』には杜甫が自身で詩を編年しようとした痕跡がうかがえることを論じた論考を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
孟浩然や韓愈といった著名な詩人の訳注は、一般読者の漢詩の裾野を広げ、研究者にとっても重要な基礎的資料となる。特に孟浩然は日本ではこれまで研究者による本格的な訳注は出版されていなかった。
詩のおかしみはこれまであまり取り上げられることがなかったが、韓愈詩の他者戯画化に焦点を当てて、韓愈の諧謔と正面から向き合った論考を発表した。
従来杜甫は『杜詩詳注』によって読まれることが多かったが、最古の版本『宋本杜工部集』の分析を通じて、杜甫が安史の乱後に編年意識を持つようになることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I undertook the writing and editing of annotated translations and published 'Wang Wei and Meng Haoran' (Meiji Shoin, responsible for Meng Haoran) and 'Annotated Translations of Han Yu's Poems, Volume 3' (Kenbun Publishing, co-editor).
In my research on Han Yu's creative activities, I focused on his playfulness, particularly in poems that caricatured others, discussing how these works are amusing and serve to soothe the unfortunate situations of others.
I gave an oral presentation at the symposium 'What Did the An Lushan Rebellion Bring to Du Fu?' and, based on the results, published a paper arguing that traces of Du Fu's attempt to chronologically organize his own poems can be observed in the 'Song Edition of Du Gongbu's Collected Works'.

研究分野：中国古典文学

キーワード：中唐文学　韓愈　杜甫

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

唐代を初唐（618-709）、盛唐（710-765）、中唐（766-835）、晩唐（836-907）に区分するのは文学史の常識とされている（西暦は小川環樹『唐詩概説』に依る）。だがこの時代区分は、もともと李白、杜甫、王維、孟浩然などが活躍した時代を詩の最盛期と見なす明代の文学史観に基づいたものであり、中唐という時代を低く評価するものであった。近年になって、中唐が盛唐に匹敵する重要な時代であると認識されはじめ、日本では中唐文学会が発足するなど、研究が盛んに行われているが、その中唐文学も大暦年間（766-779）に活躍した詩人たちと、元和年間（806-820）とでは、その詩風が全くといっていい程異なっている。文学の変わり目、新たな文学活動という意味では、元和という時代が、大きな節目になるのであり、日常を詩にするといった、宋代文学に直接繋がっていく要素も数多く持つのである。

また、憲宗が即位して王伾・王叔文一派が一掃され、元和へ改元された年は、中唐を代表する文人たちにとっても、人生の節目となる年であった。韓愈は六月に左遷地から都長安に召還され、国子博士として教鞭を振るうこととなる。白居易と元稹は、天子の御前で行われる才識兼茂明於体用科に揃って及第し、エリートコースを進んでいく。一方、柳宗元と劉禹錫は王伾王叔文の政治改革に参加したために、厳しい左遷の処分を受け、政治生命をほとんど絶たれて任地へ到着した年であった。この中で、韓愈・白居易・元稹らは新しい時代への期待感が現れ出たような新しい創作活動を行っており、柳宗元や劉禹錫は左遷地で悲哀と向き合い、彼らとは異なる新たな文学を創り出している。

中唐文学の重要性が明らかになっている現在においては、従来の初唐盛唐中唐晩唐という分け方とは異なる、新しい時代区分が考えられるのではないだろうか、そして元和年間に時代の大きな区切れ目となる文学の変革が起こったのではないだろうか。中唐を大暦と元和に分けるのは過去の詩話などでも見られるが、音律に関することや抽象的な言葉で説明するにすぎない。この元和年間における詩と文の変革の全体像を明らかにしてまとめ上げることを最終的な目標として研究を進めていく。

２．研究の目的

前述の目標の達成のためには多くの年月と研究の蓄積が必要であり、本研究ではまず韓愈を中心とした研究を行うが、後述するように、明治書院新釈漢文大系詩人編の孟浩然の執筆を進めていたこと、シンポジウム「安史の乱に杜甫は何をもたらしたのか」のお誘いを受けたこともあり、開元天宝の盛唐詩から安禄山の乱後にかけての詩風の大きな変化にも着目していく。以前に拙稿「唐詩変革―安史の乱前後に於ける李杜の詩から」（『日本中国学会報』第六十八集、二〇一六年）の中で編年という観点から、盛唐・中唐という時代区分や、李白・杜甫は盛唐の詩人という枠組みを取り払って考えてみると、より編年にふさわしいものへと向かう詩の動きは、安史の乱を契機に起こっていることを論じた。安史の乱も中唐元和期と同じく大きな文学変動が起こった時期であり、本研究ではこの二つの時期を軸として、孟浩然・杜甫・韓愈に焦点を当てその文学の特質を明らかにする。

３．研究の方法

孟浩然・杜甫・韓愈を中心に詩の精読を進めていく。孟浩然については開元期の典型的な盛唐の詩風を明らかにすることで、安史の乱以後の文学変動の特徴をより鮮明にしていく。杜甫については安史の乱後の詩を重点的に読み進め、『宋本杜工部集』をテキストにすることで『杜詩詳注』を読むだけでは気づき得ない特徴を明らかにしていく。韓愈については『韓愈詩訳注』の編集作業を土台にして、特に諧謔の要素に着目していく。

４．研究成果

孟浩然詩の訳注執筆作業を続け、共著『王維・孟浩然』（明治書院新釈漢文大系詩人編、二〇二〇年）を刊行した。孟浩然は「春眠暁を覚えず」（「春暁」）で知られる有名な詩人で中国では様々な注釈書が出版されているが、日本では様々な詩人選集の選に漏れてきた。そうした中で、一〇二首と全体の四割ほどだが詳細な注釈と解説を施した日本語訳が初めて出版されたことは画期的といえる。また、本書の大きな特色は、過去の孟浩然の詩集が詩体別か分類別で配列されていたのに対して、地域別で組んだことである。どこで作られたか分かるがいつ作られたか分からないところに孟浩然の、ひいては盛唐開元期の詩の特質があると思われる。孟浩然の詩がいつ作られたのか分からないのは、官歴がない、時事を詠わないなど様々な要因がからんでくるが、結局のところ、時系列に沿って読まなくても詩人の理解に差し支えないような詩を作っているところにある。孟浩然の詩風が生涯変わることがなかったため、時系列で読む必要がないともいえるが、孟浩然が活躍した時代は安史の乱の前、ちょうど開元年間（七一三～七四一）と重なることが大きく関わってくる。この時代は「開元の治」と称され、唐王朝の最盛期にあたり、安定した時期であった。いわば変化のない時代であり、極端な言い方をすれば時代は流れていなかった。このため、孟浩然の詩は編年が困難であり、変わることのない詩風となっているのである。

一方で杜甫は、開元元年の前年にあたる先天元年（七一二）に生を受けて、開元天宝の平和を享受しつつ、安史の乱によって王朝が一気に傾き、自身も翻弄されることで、詩風が大きく変化していく。シンポジウム「安史の乱に杜甫は何をもたらしたのか」（日本杜甫学会第六回大会、二〇二二年、京都女子大学）で口頭発表「「自京赴奉先県詠懐五百字」以降の杜甫詩の展開について」を行った。その中で、『宋本杜工部集』の配列に従って読み進めていくと、「自京赴奉先県詠懐五百字」以下三首の詩に「天宝〇載〇月」に詩を作ったという自注が立て続けに記されていることを足がかりに、何年何月に作ったと明快に分かる詩は杜甫自身が後に自注を書き加えることで安史の乱勃発の天宝十四載十一月から始まること、安史の乱以降杜甫の編年意識が強まっていくこと、自身の家族のみならず他者の家族や私生活にも言及する詩が増え出すこと等を論じた。「天宝〇載〇月」という自注は『杜詩詳注』では削除されているものもあり、『宋本杜工部集』を読み進めることで明らかになることである。本発表をもとに執筆した論文「杜甫の自注にみえる編年意識について」（『杜甫研究年報』第六号、二〇二三年）では、さらに宋本杜工部集巻二の前半の配列は、杜甫自身の手で詩を並べた痕跡が残されている可能性があり、ここにも杜甫が自身で詩を編年しようとした意図が窺えることを明らかにした。

こうした杜甫の詩風の変化が中唐元和期の文人達にどのような影響を与えたのか、在世当時ほぼ無名の存在だった杜甫は、中唐の韓愈・白居易・元稹によって見出されるが、川合康三氏が「杜甫のなかからそれぞれ自分の詩観に合った部分に光を当てて讃え、且つそれを自分の文学として構築することを目指したのである。」（『中国の詩学』、研文出版、二〇二二年。一九二―一九八頁参照）と述べたように、その見出した点はそれぞれの詩観によって異なっている。ただ、白居易の諷諭詩、韓愈の規範を逸脱した表現については当人の文学の根幹をなすものと広く認知されているが、元稹は一般には艶詩の作家として知られ、杜甫の継承についてはこれまで言及されてこなかった。この問題について、第三十八回京都大学中国文学会（二〇二三年開催）で口頭発表「元稹の詩風―杜甫の継承」を行い、一百韻の排律や日付を記した紀行詩など、杜甫が開拓した分野を元稹も制作していること、元稹の文集に見られる詩題の自注に『宋本杜工部集』の詩題の自注の影響が見られることなどを中心に論じた。

韓愈については、共編『韓愈詩訳注』（研文出版）の編集作業を進め、二〇二一年に第三冊を刊行した。韓愈は元和元年の六月に長安に召還されるが、銭仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』の編年に従えば、翌年夏に洛陽勤務を願い出る一年ほどの間に、終南山の威容を描き尽くした「南山詩」（２０４句）や、孟郊との「城南聯句」（３０６句）をはじめとして、驚くべき量の創作活動を行っており、こうした作品の中には韓愈の遊び心が感じられるものがある。その中でも韓愈の諧謔、特に他者を戯画化した詩に焦点を当てて研究を進めた。韓愈の諧謔味を感じさせる詩は貞元年間にも見られるが、元和年間以降に顕著になっていく。また、陶淵明・杜甫・韓愈には自己を戯画化した詩が見られる点で共通しているが、他者を戯画化した詩は韓愈に特に多く、豊かな世界が広がっている。「韓愈詩における他者の戯画化」（川合康三先生喜寿記念論集刊行会編『〈中国の詩学〉を超えて』、研文出版、二〇二四年刊行予定）の中で、仏僧のいびきを描いた「鼾睡を嘲る二首」、論戦を戯画化した「病中　張十八に贈る」などの詩、天を擬人化した「孟東野　子を失う」などを取り上げてその表現の面白さを分析した。「鼾睡を嘲る二首」は、仏僧のいびきの様子を面白可笑しく描くことに終始しており、ただ諧謔自体を目的として詩が作られているところに特色がある。また、論戦を戯画化した詩では、「石鼎聯句詩」のように劉師服と侯喜を論破したことを下敷きにして韓愈一人で聯句を制作していたり、「魯連子を嘲る」詩のように自分が打ち負かされたケースも詩にしたりしており、その戯画化には、相手に対する批判めいた言い回しや負けた悔しさをおかしみによって和らげる効果を生み出している。「孟東野　子を失う」では、韓愈がどのような天人観で幼子を亡くした孟郊を慰撫しようとしたかという思想の観点からではなく、韓愈がどのような表現で孟郊を慰撫しようとしたかという文学の観点から分析を進めた。天はおよそ相手が納得するものとも思えぬ苦しい言い訳に終始して強弁を繰り出しており、天の台詞によっておかしみを感じさせるのは戯画化のひとつの形といえる。自己戯画化には自己の不幸を慰撫する働きがあるが、韓愈は他者の戯画化には他者の不幸を慰撫する働きがあるという考えのもとに、「孟東野　子を失う」詩の中で孟郊や神を戯画化した可能性を論じた。幼子を立て続けになくして家を継ぐ者を失うという深い絶望には、どんな理屈や慰めよりも諧謔が大きな力を与えることを韓愈は自覚してこの詩を作ったように思えるからである。

『中国の詩学』第二十二章「詩と諧謔」の中で述べられているように、政治性や道義性が中国の詩の特質とされてきたため、それとは縁遠い存在である諧謔はこれまであまり研究されてこなかったが、その諧謔と正面から向き合って表現の面白さを掘り下げた点に本研究の意義がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 好川聡	４．巻 6
２．論文標題 杜甫の自注にみえる編年意識について―「自京奉先縣詠懐五百字」以降の展開	５．発行年 2023年
３．雑誌名 杜甫研究年報	６．最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 好川聡	４．巻 -
２．論文標題 韓愈詩における他者の戯画化	５．発行年 2024年
３．雑誌名 川合康三先生喜寿記念論集刊行会編『〈中国の詩学〉を超えて』	６．最初と最後の頁 171-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 好川聡
２．発表標題 「自京奉先縣詠懐五百字」以降の杜甫詩の展開について
３．学会等名 日本杜甫学会第六回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 好川聡
２．発表標題 元ジンの詩風―杜甫の継承
３．学会等名 第三十八回京都大学中国文学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

1．著者名 川合康三・緑川英樹・好川聡編	4．発行年 2021年
2．出版社 研文出版	5．総ページ数 481
3．書名 韓愈詩訳注第三冊	

1．著者名 二宮　美那子、好川　聡	4．発行年 2020年
2．出版社 明治書院	5．総ページ数 548
3．書名 新釈漢文大系 詩人編3　王維・孟浩然	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関